■研究十二月往来〈211〉

魅入られた光源氏

高田祐彦

『源氏物語』夕顔巻。夕顔の女君を取り殺した「謎の女」の正体については、古来議論が喧しい。今なお決着を見ていないと言ってよい。それらはおおむね、六条御息所の生霊説と「なにがしの院」の妖怪説とに分かれ、古くは生霊説、比較的新しいのが妖怪説ということになるが、実はなかなか複雑な問題を抱えている。

ここでは「謎の女」の受け止め方を概観した上で、夕顔と光源氏をめぐる物語をさらに広い視野から見てみたいと思う。

生霊説は、室町時代の『源氏物語』の注釈書『花鳥余情』あたりから見え始め、江戸時代頃までは、一般的であったようだ。源氏の夢枕に立った女の次のような恨み言は、御息所のものと見て不自然ではない。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、灯も消えにけり。

これを生霊のことばと見ると、生霊の出現は、その直前に源氏が夕顔と御息所を比較したことがきっかけになっていると考えられ、古注釈でもそのように述べている。

内裏にいかに求めさせたまふらんを、いづこにも尋ぬらんと思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向ひをあはれと思すままに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまを、すこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。

女君の名を出すとその霊が出現する、という例は、薄雲巻の藤壷や、若菜下巻の六条御息所などの例があるので、ここもそれらと同様に考えたのであろう。

一方、妖怪説は、幕末の萩原広道『源氏物語評釈』あたりから現れ、現在ではほぼ定説に近い。その最大の根拠は、光源氏本人がそのように認めているという点にある。夕顔の死後、その四十九日の法要を済ませた後、次のような叙述がある。

君は夢をだに見ばやと思しわたるに、この法事したまひてまたの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、荒れたりし所に棲みけんものの我に見入れけんたよりに、かくなりぬることと思し出づるにも、ゆゆしくなん。

源氏は、「謎の女」の姿を「なにがしの院」で二度も目にしているにもかかわらず、最後までそれを六条御息所とは見ていない。この点、六条御息所の生霊の姿をまざまざと見た葵巻、また、紫の上に憑いた死霊の姿を見た若菜下巻とは、決定的に異なっている。

ついで考えるべきは、源氏と夕顔が泊まった「なにがしの院」の問題である。「なにがしの院」は、源融が住んでいた河原院のイメージで受け止められてきた。河原院は、融の没後宇多法皇に献上されたのち、次第にさびれ、『源氏物語』の時代にはかなり荒廃していたらしい。この河原院には、『今昔物語集』などに載る怪異譚が知られている。たとえば、宇多法皇が京極御息所と泊まった折、融の亡霊が現れて法皇に抱きついた話（説話によっては、御息所に抱きつき絶命したというのもある）はよく知られている。また東国から上京した

夫婦が河原院に宿ったところ、怪異の「もの」に妻を殺されてしまった、という説話もある。さらに、河原院ではないが、『今昔物語集』には、ある男が、古い堂に愛人と泊まったところ、主と称する女が現れて退去を求められるが、愛人は汗びっしょりになり、立てない、ようやく男が背負って出たものの、翌日亡くなってしまった、という話がある。

こうした怪異譚は、ほかにも数多くあり、夕顔の物語の基盤になっていたと思われる。実は、六条御息所の生霊説が現れる以前、鎌倉時代には、妖怪説に近い「こだま（木霊）」説が通用していた。『無名草子』『弘安源氏論義』といったよく知られる資料に載るものだが、御息所の生霊の出現といった男女の愛憎の世界よりも、怪異譚をベースにした享受のあり方といえよう。「こだま」は、夕顔巻には出てこないが、末摘花の住む荒れ果てた常陸宮邸にわがもの顔で現れ（蓬生巻）、浮舟がやはり人気のない宇治院で発見された時に「鬼か、神か、狐か、木霊か」と不審に思われる（手習巻）など、荒廃した屋敷にいるものと思われていた。

このように見ると、夕顔巻の読み取りとしては、妖怪説に軍配が上がりそうである。しかし、すでに広道も注意していたことだが、六条御息所の影を完全に駆逐してしまうことはできない。源氏と夕顔の恋には、御息所の存在がぴたりと寄り添っているのであって、もし御息所と源氏の関係抜きでこの巻が書かれていたならば、まったく奥行きの浅い物語に過ぎなかっただろう。さりとて、安易な折衷案は慎まねばなるまい。単なる「謎の女」の正体という観点を克服しながら、この巻を読み解くためには、源氏の「もうひとつの恋」と魅入られる源氏という二つの観点が必要だと思われる。

夕顔が息絶え、長く恐ろしい夜がようやく明けようとする頃、源氏は、「わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心のむくいに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり」としみじみ思う。これは、源氏が何かただならぬ恋をしている証拠であり、夕顔や六条御息所との忍びの恋以上に重大な秘密を抱えていることがわかる。後にそれは藤壷との関係と判明するが、ここに抱え込まれた並々ならぬ謎が、夕顔の物語をさらに一段深い闇で取り巻くことになるのである。「六条の女」として登場する御息所は、実は夕顔巻では、その素性が明確にされていない。葵巻で明らかになるような前東宮妃という立場ではなく、あくまで高貴な謎めいた源氏の通い所なのだ。そうしたあり方は、源氏の重大な秘密とどこかでつながるような存在だと思われる。

一方、源氏は、廃院の妖怪に魅入られたために夕顔の死という事態を招いたのだ、と受け止めていたが、源氏自身も、夕顔の葬儀をひそかにとりおこなった後、重く煩った。これは、この巻だけを見ると一種の怪談と読めるが、実は若き日の源氏には、その秀麗さのゆえに死の危険がつきまとっていた。紅葉賀巻では、青海波の舞のあまりのすばらしさに、弘徽殿女御は、「神が空から魅入りそうなこと」と憎まれ口を叩き、葵巻の斎院御禊の折には、その尋常ならざる美しさに、式部卿宮は「神が目をつけそうだ」と不吉に思ったという。これらは、物語の理想的な主人公ならではのあやうい存在性を示しているが、異界になかば引きずり込まれ、もっとも危険な目にあったのが、夕顔巻で「謎の女」に魅入られたことだったと考えることができるのではないか。源氏は、一種の〈死〉から蘇り、藤壷とのさらなる闇を生きなければならない。

夕顔と源氏の物語は、源氏にとっては中流階級の女性との人知れぬ恋の世界であった。物語は、それを宮廷世界とは別次元の非日常的な出来事として語っているが、そこには、源氏という稀有な主人公に与えられた属性の本質的な部分が意外に生きているように読めるのである。

（青山学院大学助教授）